

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	15
瑪瑙集	27
紅玉集	29
俳誌交歓	31
5月号月評	32
惠贈句集拝見(74)	34
惠贈俳誌拝見(40)	36
他誌転載	38
特別作品「寺袂」	40
琥珀集作品鑑賞	42
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	43
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ	44
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	45
石川節子賞贈賞式	48
イザナミの言語学(5)	50
環本部句会報(10)	52
琵琶湖俳句サロン	54
エッセイ「節供か節句」	55

今月の一句

めまとひを打ちしひびきや志士旧居 桂樟蹊子

一乗寺下り松め辻から北へ歩き雲母坂へ行く。これは比叡山憎兵が京を往来した昔道である。葉山観音の参道の崖下に梅田雲浜の住んでいた平地が今も残っている。若狭小浜の藩主であったが、攘夷論は空しく獄舎で病死した維新前の勤皇家である。

貧しい暮らしを続けた彼の妻の歌に「西日射す九尺二間の裏長屋飯は焦げつく子は背で泣く」がある。払っても払っても顔にまといつくこの虫を苦々しく思ったとの自註がある。

隆子

麦を踏む

塩路隆子

芽吹くときがうと音して公孫樹

忘れ雪消ゆれば雀賑やかに

紅梅のほのかなる艶二日月

麦を踏むゴツホに似たる人の影

嬰に小さき宇宙やシャボン玉無数

根っからの光秀鼯鼠春炉の辺

見目よきは郷士の裔や畑を打ち

五月号光耀抄

塩路 隆子選

餓ゑ鳥群れて啄む寒の餌
シュレツダーにかける恋文春の塵
角燈の灯る長崎春の宵
逢ひに行く鴨との別れ近づきて
盆梅や盆梅課ある城下町
カトレア展少しおしやれな友誘ひ
訃へ急ぐ振子列車や春の雪
貝寄風やバイト募集の釣具店
爺ふたりはや酌み交すひひなの間
長々と世にある限り納税期
紅梅や空の深さを更にして
春宵や切子グラスを傾けて
墓石に交じりて在はず寝釈迦かな
車窓より手を振るやうな花菜見て
春の水フオッサマガナを跨ぎける
梅の道吾が歩に合はず雀みて
華やげる和菓子店の御殿雛
燕来る江戸世造かの浦会所
雪の朝しじまの包む街となり

杉本 綾
森下 康子
山口キミコ
竹内 悦子
小澤 菜美
伊東 和子
橋本 靖子
藤見佳楠子
阪本 哲弘
北尾 章郎
笹井 康夫
井口 淳子
和田 郁子
石川かおり
大越 義雄
大島みよし
笠井 清佑
片岡久美子
桂 敦子

左右の手の柔と剛なり春更けて
 日だまりを身じろぎもせず春の鹿
 天麩羅并少し苦味の春野菜
 雪解風余呉の湖面を撫でて過ぐ
 日の匂ひ風の匂ひや梅日和
 定年の父薔薇の花束抱へ持つ
 バケツ帽傾げる春の雪だるま
 鶯の声捉へたる藪の中
 白梅や父のげんこつ懐かしく
 紅梅に繋がる犬よく吠えて
 京町屋の大正ガラス春の雪
 大門を出でて名物蛭めし
 風光るをんな杜氏の朝しぼり
 春服の貝紫に透くる肌
 雪解けて悪戯鴉畑つつく
 たはむれに片足浸す春の水
 梅林の華やぐ地下の弾薬庫
 子規館を出て山菜莢の花こぼす
 荒神を祀りたる宮春一番
 招かざる客来たると寒戻り

川崎 利子
 国包 澄子
 坂上 香菜
 坂根 宏子
 塩路 五郎
 西郷 慶子
 鈴木 照子
 難波 篤直
 西村 敏子
 能勢 栄子
 藤本 秀機
 増田 一代
 松岡 和子
 松田 和子
 宮田 和子
 山本 丈夫
 落合 晃
 松田 洋子
 黒住 康晴
 大堀 賢二

土筆伸ぶ水野左近の屋敷跡
 麵麩生地のみくらみ速し春兆す
 書に浸る春どか雪に如くはなし
 春泥を来て春泥を帰らざる
 春服を纏ひう行の気分なり
 雛飾り白酒酌みてふたり住
 もてなしは世間話と桜餅
 春宵や耳底に残るシヨパン曲
 旅果ての琵琶湖大橋むぼろの灯
 春雨や竹藪甚だしく揺るる
 けふ雨水人も車も通らざり
 菓子老舗玄関先の紅つばき
 勇敢な先人たちよ海鼠喰ふ
 梅咲くや近江離宮の水時計
 春潮の瀬戸内さすが鯛の飯
 古都の春見渡す回転レストラン
 雛の軸かけて若やぐ媼会
 岩に立つ不動三尊芽木の風
 早春や磨き上げたる銀食器
 老木に花咲かせけり春の雪

宮崎左智子
 栗倉昌子
 山本孝夫
 常田創
 常田希望
 西田史郎
 小林久子
 大谷信子
 三川美代子
 山崎真義
 山田愛子
 横田矩子
 吉田宏之
 山崎里美
 渡部法子
 飯田美千子
 伊藤和子
 伊藤純子
 伊藤憲子
 稲田和子

忌の集ひやがて花見の相談に
 郷愁の加賀や降り積む今朝の雪
 潮噴きて海を恋ひをりあさり貝
 昼過ぎて比叡の雪形動きけり
 白煙の千里の帷蘆を焼く
 寒戻る大音響にカーラジオ
 雪うさぎ飾りて町屋お茶講義
 鳥風の雲間に発し日矢二条
 雲に乗る風神雷神春寒し
 五輪塔太閤様はをとこ雛
 桜湯の花びらゆれてさくら色
 夫と踊るラストダンスや春の夢
 田舎駅のベンチあたたか文庫読む
 春陽浴び駅の雑踏カラフルに
 横たはる牛の眼確と梅三分
 春一番北山杉の砂磨き
 白銀の神の造形雪景色
 修復の軸芯太き涅槃絵図
 春泥や歩み重たき喪のおくり

伊庭 玲子
 大松 一枝
 木戸 宏子
 小西 和子
 佐用 圭子
 鈴木 江奈
 鷺見たえ子
 高谷 栄一
 田中 淺子
 谷口 俊郎
 辻 香秀
 辻 知代子
 中井 弘一
 中井 登喜子
 中川 すみ子
 秦 和子
 平井 紀夫
 福本 すみ子
 森田 利和

琥珀集

童心

森下 康子

控へゐる抽斗奥の春シヨール
散歩道に春を探すや万止少計

マカロンの新作試食雛祭

シュレツダーにかける恋文春の塵ごみ

騙されてみたき時あり紅椿

何ごとも無心がよろし春の霜

啓蟄や童心沸と蘇り

寒の餌

杉本

綾

山笑ふ切手に使用期限なく

我が庭はむかし寺院やつくづくし

亡夫よりも生きて肥沃な畑を打つ

観梅の嵐電どこで降りやうか

末黒野や淀ににぎはふ草野球

壬生狂言一声もなく鉦の音

餓ゑ鳥群れて啄む寒の餌

角燈

山口キミコ

角燈ラシタンの灯る長崎春の宵

牡蠣入りのチャンポンを先づ里帰り

遠き日のままに咲きをり里の梅

法華寺のからたち垣根芽吹きける

奈良の古寺訪ぬる講座うららなり

斑肌の若草山や春の色

黄水仙咲きて狭庭の華やげり

石鹼玉

竹内 悦子

カトレア展

伊東 和子

園児らの夢膨らます石鹼玉

春シヨール茶事終へ軽き裾捌き

若葉マークの後を走るや山笑ひ

いぬふぐりたをやかに空見据ゑける

春風や大気汚染を疎みつづ

嬰を抱く頬を撫でをり枝垂桃

逢ひに行く鴨との別れ近づきて

カトレア展少しおしゃれな友誘ひ

美容院窓辺に室の花咲かせ

告ぐべきか否か佳き夢春の朝

我が町を包める夕焼二月尽

垣根越し小鼓ひびく梅日和

十七文字書きて又消す春炬燵

山裾の翳りに漱ぐ梅の宮

盆 梅

小澤 菜美

振子列車

橋本 靖子

蜃気楼に一船崩れ大津沖

陽炎うて水庭の吾紛れけり

霾や帝釈天は美男にて

盆梅や盆梅課ある城下町

凶神籤に良きこと書かれ梅の宮

藍の鉢にひと粒咲ける花菜漬

剥落の古木荒肌春疾風

訃へ急ぐ振子列車や春の雪（特急やくも）

ベッドの嬰の方歳あくび長閑かなり

春愁や乳白肌の藤田の画

春雨にふつくら青む寺の苔（秋篠寺）

梅明りに舞ひ出でんとや伎芸天

「釘煮です」春連れて来る宅急便

今に残る廓格子や霾埃

貝寄風

鳳凰の復元宇治の風光る
盆点の懐紙に受くる桜餅
カーナビになき旧道や山笑ひ
陽炎へるバスは一日二往復
色褪せし卒業写真梅日和
貝寄風やバイト募集の釣具店
汚染水漏れのニュースや春寒き

青き踏む

しんがりの購ふ地酒梅探る
愛着の路面電車や卒業し
嫁に似る木彫の雛を選ひけり
爺ふたりはや酌み交すひひの間
山里に上がる産声山笑ふ
些かの医療費還付蜆汁
終活を先送りせむ青き踏む

藤見佳楠子

納税期

二月末締めあり曆確かむる
春雪に足止め食らひ温泉三昧
長々と世にある限り納税期
落椿寺苑の暮色深めけり
梅東風やぶつかり合へる絵馬の示威
セピア化の旅のアルバム鳥曇
北帰行の白鳥ならむ最上川

阪本 哲弘

初 午

紅梅や空の深さを更にして
八木邸に刀傷あり春立つ日
初午や昭和遠のく赤鳥居
菜の花や比良白峰は湖に映え
あどけなき寝顔を見せて雛の間
日脚伸び行先告げぬバスの旅
親子連れの天神詣梅ふふむ

笹井 康夫

北尾 章郎

花菜みち

井口 淳子

揚雲雀

石川かおり

金メダル取りて日本の春動く

下萌や吾もひとつの発光体

春宵や切子グラスを傾けて

園児らの声にぎはへる花菜みち

公開の天津事件や冴返り

水仙の香を描かむと水墨画

春深し賢治遺愛のバイオリン (賢治ゆかりの人演奏)

紅梅や美人祈願の絵馬掛けて

鳴き交はす白鳥の群帰りけり

果のなきをんなの話揚雲雀

背もたれに春シヨールまた忘れられ

つくばひの雫丸きや風光り

車窓より手を振るやうな花菜見て

物干しのシャツをからませ春風

あたたか

和田 郁子

フォッサマグナ

大越 義雄

墓石に交じりて在はず寝釈迦かな (報恩寺6句)

秀吉の好みの香炉あたたかき

あたたかなまなざし親し阿弥陀像

「鳴虎図」の水呑むさまや朧なる

囀りや内緒遊びを見つつ過ぎ

春浅し撞かずの鐘の威を保ち

春愁や武将の位牌ある客間

光風にレジェンド葛西いぶし銀

春の雷笑ひころげて通りけり

路味噌や五臓六腑を香らせて

樵芽吹き全山のち甦る

山の音水の音して春きざす

春の水フォッサマグナを跨ぎけり

大佐渡の桜花けぶるや世阿弥墓所

梅の道

大島みよし

燕来る

片岡久美子

梅の道吾が歩に合はず雀ゐて

咲き初むる一と枝ごとの梅を愛で

深呼吸上がり下がり梅の道

触れてみて撫でて愛でゐる芝桜

時空より力を得たる芝桜

河川敷を浸し広がる春の水

音微か水車の撥ぬる春の水

享保雛

笠井 清佑

梅日和

桂 敦子

悠久の旧址に柳芽吹きけり

障子引き春風入るる町家かな

華やげる和菓子店の御殿雛

白椅子と白テーブルや春日差

初音聞く早朝出勤足止める

若き日の聖書講読梅日和

守り継ぐ卒寿の人の享保雛

赤穂の湯瀬戸の春光一望に

燕来る江戸世造りの浦会所

川と浦つなぐ街道梅白く(坂越)

浜に干す目刺一連購ひぬ

太陽光パネル広がる里のどか

舞へる手の如くたをやかシクラメン

はこべらをむかし兎に摘みしこと

雪の朝しじまの包む街となり

日の射せば雪解雫の賑やかに

万両の一粒つつの艶やかさ

芽柳に誘はれ歩む川辺かな

笑うてはいやいやする嬰梅日和

老木の荒れたる肌や春日差

公園の鳩へパン屑うららの日

瑠璃集

猫の目

猫の目に射すくめらるる春の宵
漬物石の膨らめるかに春日差
片栗の花の仕種や風受けて
春の闇もぞ動く座敷犬
荒神を祀りたる宮春一番

黒住 康晴

山笑ふ

咲き初めし一枝ごとの梅を愛で
梅林の華やぐ地下の弾薬庫
園児等の会釈に答へ梅の坂
下萌や馬丁真赤なシャツを着て
殿の走者へテープ山笑ふ

落合 晃

白魚

お水取済むまで薄着出来ませぬ
招かざる客来たるごと寒戻り
風の音に踊り納めと春の雪
白魚の旨さに惹かれ深酒す
暖かや気付けば空へ深呼吸

大堀 賢二

山菜莢

海峡に数多の小舟風光る（四国五句）
陶板の絵の鮮やかや霞む中（大塚美術館）
新物の若布うどんや香り良き
子規館を出て山菜莢の花こぼす
のどかなり坊ちゃん電車行き交うて

松田 洋子

ゴム風船

陽だまりに寝そべる猫や春隣
麵麩生地のおくらみ速し春兆す
児の髪に春の光を編み込みぬ
女兒三人の個性それぞれチューリップ
戻り寒ゴム風船の犬洞み

栗倉 昌子

五月号月評

塩路 隆子

今月の月評は瑠璃集を選んだ。琥珀集には七句の中に少なくとも二・三句は納得のゆく句がないと琥珀集には推薦出来ない。しかし瑠璃集の五句の中には琥珀集に劣らない秀句もある。今月は瑠璃集からの句に焦点をあててみよう。

梅林の華やぐ地下の弾薬庫

落合 晃

昨年「瓊」の一泊吟行で和歌山県加太の旧要塞を訪れた。梅の時期が過ぎて桜の蕾がふくらんだ頃である。ほの暗い地下に掘られた弾薬庫など、まさにこの通りの情景に出くわした。戦時を想うと胸の締め付けられる思いがした。地下の華やぎと弾薬庫の取り合わせに、戦時の思い出が更に空しく胸をよぎる。

子規館を出て山茱萸の花をこぼす

松田 洋子

松山へ行かれた連作の一句である。子規の思い出のあれこれを集めた子規館を訪れた作者は、館を出た後、何となく触れたのであろう山茱萸の花をこぼした。短い命を精一杯生きた子規の生き方に感動をした作者は、その

小さな出来事でさえも敏感に自責の念に駆られたのである。多くを語らずに心情を読み取れる句である。

荒神を祀りたる宮春一番

黒住 康晴

荒神（あらがみ）を辞書でひくと「ただけしく、霊験のあらたかな神」とある。お参りをした作者を襲ったのは立春後初めて吹く温かく強い風、春一番であった。「荒神」と「春一番」の取り合わせの上手さ、今後の楽しみな作者である。

招かざる客来たるごと寒戻り

大堀 賢二

句歴の浅い作者であるが時々ヒットを放たれる。「寒の戻り」を「招かざる客」と表現するなどの発想が抜群に面白い。擬人法に置き換えているが「如く」を納得のゆく使い方をされた。頑張つて頂きたい。

麴麴生地のかくらみ速し春兆す

粟倉 昌子

主婦らしい句、主婦でなければできない句であろう。毎朝焼かれるイースト菌を入れたパン生地が、気温が高くなつて発酵が早くなったのであろう。素早く俳句にされるあたり主婦歴がものを言う作品である。

(以下略)